

レイナルド・C・イレート

『キリスト受難詩と革命』

— 1840～1910年のフィリピン民衆運動』

清水展・永野善子（監修），川田牧人ほか（訳），法政大学出版局，2005

Reynaldo Ileto. 1979. *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*. Quezon City: Ateneo de Manila University.

〈底辺から〉の歴史へ

フィリピン人歴史家レイナルド・イレートの名著『キリスト受難詩と革命—1840～1910年のフィリピン民衆運動』が描いているのは、スペイン植民地支配に対する蜂起として始まったフィリピン革命（1896年）から、米西戦争（1898年）に勝利したアメリカ合衆国が、スペインに代わりフィリピンを植民地化することに抵抗した一連の民衆運動の軌跡である。本書の最大の特徴として指摘すべきは、ルソン島低地社会で当時膾炙していたイエス・キリストの受難を描いたタガログ語の歌や詩、土着化した宗教的儀式や実践に着目しながら、「無知」で「盲目」とされてきた民衆の視点から革命運動を描き出していることである。

いわゆるエリートが主導したことを強調する従来のフィリピン革命論に対して、最初に異を唱えたのはフィリピン史研究の重鎮テオドロ・アゴ

ンシリョであった。アゴンシリョは、1956年『大衆の反乱—ボニファシオとカティプーナンの物語』（*Revolt of the Masses: The Story of Bonifacio and the Katipunan* 未邦訳）を刊行し、アメリカ植民地時代の歴史教科書では軽視されていた革命結社カティプーナンとその創設者アンドレス・ボニファシオの役割に初めてスポットライトを当てた。アゴンシリョによれば、「世界史を広く見た場合、武器を持って民族自決のために闘った人物が英雄でないのはフィリピン史だけである」という。

イレート自身、アゴンシリョから多くの触発を受けており、『大衆の反乱』が存在しなければ、本書が世に出ることはなかったといっても過言ではない。とはいえ民衆の視点から革命史を描き出すという目的を共有しているからこそ、イレートはアゴンシリョに対して異議も唱えている。例えば西洋からもたらされた独立の意味は、エリートだけでなく民衆たちも理解していたと論じたアゴンシリョに対して、次のような批判をイレートは寄せた。

大衆——革命の大衆的基盤をなし、おもに地方に住み公教育を受けていないフィリピン人たち——にとって革命がもつ意味については、疑問が残されたままである。有産知識階層の思考のなかで明らかに表現されることがなければ、大衆のものの見方や目標は形をなさず不完全で意味をもたなかったなどと、考えるわけにはいかない。（p.10）

近代西洋の諸概念によって、フィリピン革命に参加した民衆の思考や目標を理解するのではなく、民衆の世界観に基づいて理解すること、そのためにイレートが着目したのが、フィリピン化されたカトリシズムであった。イレートによれば、民衆が朗読しながら慣れ親しんでいたイエス・キリストの受難の物語（『パッション』）は、フィリピン社会において相矛盾する二つの機能をもっていたという。一つ目の機能は、スペイン人植民者た

ちがスペインと教会への忠誠をフィリピン人に教え込むというものであった。そして植民者や宣教師たちが予測しなかった二つ目の機能は、聖書がタガログ語へと翻訳されたことによって、キリスト受難の物語がフィリピン人の置かれた境遇を照らし出す鏡になったことである。すなわち『パシオン』というタガログ語のテキストを通じて、民衆たちはスペイン植民地支配下に置かれた自らの状況を理解し、失われた母なる祖国を取り戻すために、武器をもって立ち上がったのである。なお原著では、『パシオン』は英訳されておらず、ここにイレートの脱西洋中心的な思考の一端を垣間見ることができる。

各章の要約

本書は、1章を含めた全6章とエピローグによって構成されている。1章については、上で紹介したので、ここでは2章以降の概要を記したい。

2章「光と兄弟愛」では、1841年タヤバス州においてスペイン植民地体制に抵抗した聖ヨセフ兄弟会のリーダー、アポリナリオ・デ＝ラ＝クルスの教えが描かれている。アポリナリオは、民衆に対して苦難が長期化したとしても、自己を律し、内心にあるものを変えないことを説き、「タガログ人のキリスト」として崇められていた。兄弟会には多くの人々が参加し、成長を遂げたのだが、このことを危険視した当局は、武力をもって弾圧した。アポリナリオたちは街から逃げ、近くの山に潜伏し抵抗を続けたが、鎮圧された。アポリナリオを筆頭に200人が処刑されたが、反乱の目的について尋問された際、彼らの多くが「祈るためだった」と答えたという。

3章「伝統と反乱」では、『パシオン』の詩歌や演劇を使って、カティプーナンの会員たちを鼓舞したアンドレス・ボニファシオが描かれている。従来のボニファシオ像は「無学」、「貧困層」、「狂気」といったイメージがつきまとっていたのであるが、イレートによれば、ボニファシオの説教はアポリナリオと同じく民衆の言葉や経験に根ざしており、民衆から絶大な

支持を得ていたという。

4章「共和国と1896年の精神」では、カティプーナンの会員たちの間で読まれていた詩歌が分析されている。これらの詩歌では、革命運動に参加したタガログ人たちの栄光が称えられている。抵抗する相手がスペイン軍からアメリカ軍に変わった後にも、彼らの経験が詩歌を通じて共有されることによって、祖国を受難から救うカティプーナンの精神は世代を越えて受け継がれてきたのである。

5章と6章では、アメリカ合衆国大統領セオドア・ルーズベルトが米比戦争の終結宣言を出した1902年以降も、ねばり強く抵抗運動を続けたマカリオ・サカイとフェリペ・サルバドールという2人のリーダーに焦点が当てられている。彼らはすべての人々が兄弟となり、指導者たちはキリストのようになり、あらゆる抑圧から解放され、財産が分配される社会を作り出すためにアメリカ軍や治安警察隊と闘っていた。逮捕後、サカイもサルバドールも絞首刑に処されたのだが、その場には彼らを慕う多くの民衆が集まり、祈りを捧げた。

本書への評価

現在でこそ本書は、フィリピン革命史研究の古典であると周知されているが、1979年に刊行された際には、フィリピン内外より厳しい批判が寄せられた。それらを簡潔にまとめると、①小説のような手法に依った本書は「実証的」、「客観的」な歴史書とはいえないこと、②『パシオン』がカティプーナンのイデオロギーにどれだけ影響を与えていたのかを証明していないこと、③革命運動に参加したエリートや民衆の社会経済的な動機が軽視されていること、などである。

さまざまな論者たちが本書への批判を行ってきたが、裏を返せば、本書がいかにも多くの論者たちにインパクトを与えてきたのかということである。「合理性」や「世俗性」に基づかない民衆の世界観へ読者を誘う魅力を本

書は備えており、論者たちはその世界観についての論理的、あるいは実証的な説明が必要であると考えたからこそ、このような批判が行われてきたといえる。

ポストコロニアル研究の台頭

刊行当初はさまざまな論争を巻き起こしたが、1980年代以降、アジアやラテン・アメリカ、アフリカなど旧植民地出身の研究者たちが、従来の西洋中心的な学問に対して異を唱え、学問と政治の関係を鋭く問うポストコロニアル研究という新たな分野が開拓される中で、本書は一躍脚光を浴びた。一連のポストコロニアル研究の中でも本書は、とりわけインド研究者たちによって展開されてきた非エリート階層の役割に着目したサバルタン研究と、さまざまな関心を共有している。

さらに旧植民地出身の研究者たちは、欧米研究者たちのように「客観的」、「第三者的」な立場を取ることが困難であり、政治と学問を切り離すことができない状況に置かれてきたことも強調したい。本書の元となるコーネル大学に提出した博士論文を執筆していた1970年代前半、イレートは反マルコス運動や反ベトナム戦争運動に参加していた。このような運動に参加しながら、カティプーナンの革命運動は、確かに失敗したが、この出来事はフィリピン史の中で葬り去られたわけではなく、その後現れた社会変革を実現しようとするリーダーや抵抗組織の間で、〈未完の革命〉論として現在まで受け継がれてきたことを、イレートは鋭く感じ取っていたという。そして1979年の刊行以降、本書はマルコス独裁体制に反対する政治運動を展開した多数の司祭、修道女、学生たちに読まれ、勇気を与えてきた。

私は博士課程において、イレートの指導を受ける機会に恵まれた。彼のアドバイスの中で印象に残っているのは、「西洋発の理論や手法に頼るのではなく、自分の直感や考えを信じてみることを、それによって多くの研究

者から批判されたとしても、未来の状況は変わるかもしれない。私はこの未来への賭けでこれまで勝ってきた」というものであった。過去を取り扱う歴史家の目線が、未来にも向けられていること、ゆえに刊行から40年以上の歳月が経っても、本書が不朽の名作といわれる所以なのかもしれない。なお邦訳では、日本の読者に向けた序文が新たに設けられており、イレートは本書がアメリカ帝国に対する〈底辺から〉の抵抗書として読まれることを期待している。

参考・関連文献

- Agoncillo, Teodoro. 1956. *The Revolt of the Masses: The Story of Bonifacio and the Katipunan*. Quezon City: University of the Philippine Press.
- [Ileto, Reynaldo. 2011. "Reflections on Agoncillo's *The Revolt of the Masses* and the Politics of History." *Southeast Asian Studies*. 49\(3\): 496-520.](#)

❖本書の著者紹介（レイナルド・イレート）

1946年マニラ生まれ。1967年アテネオ・デ・マニラ大学卒業。1970年コーネル大学修士号、1975年同大学博士号取得。専門はフィリピン史、東南アジア研究。フィリピン大学、ジームス・クック大学、オーストラリア国立大学、シンガポール国立大学などで教鞭を取った。ハリー・ベンダ賞（1985年）、大平正芳賞（1986年）、フィリピン国立図書賞（1999年）、福岡アジア文化賞（2003年）、グラント・グッドマン賞（2011年）を受賞。

❖執筆者紹介（芹澤隆道）

京都大学東南アジア地域研究研究所機関研究員。専門はフィリピン史、日本思想史。感銘を受けた本は本書。